

IV 研究開発の実際と成果 1

幼・小接続期カリキュラム開発

1. 幼・小接続期カリキュラムについて（研究の概要）

(1) これまでの取り組み

平成14年度（幼・小連携開発研究2年次）に接続期を設定してから、本年度で5年目を迎える。小学校入学に伴う生活環境の大きな変化を子どもたちが前向きに受け止め、安定して過ごすことができるように、幼稚園・小学校双方の教師で話し合いを重ね、実践に取り組んできた。

私達は接続期を次のように捉えている。

接続期…人との関係や周囲の環境が大きく変化することに伴い、子どもたちの戸惑い・不安・期待・緊張などを、教師が丁寧に受けとめ支えながら、教師や友だちとの豊かな関わりを基盤に、主体的に学ぶ姿勢を育む時期。

環境の変化に伴う子どもたちの戸惑い、不安が少なくなるよう、なめらかに接続していきたいと考える一方で、大きくなることや新しい出会いに胸を膨らませ、期待感をもって入学してくる子どもたちの思いに応えていくこともまた大切であろうと考え、「なめらかな接続」と「適度な段差」を念頭に接続期の実践を継続している。

また、接続期は、前・中・後期の3つに分け、次のようなねらいをもって取り組んでいる。

前期＝幼稚園5歳児10月～3月	関わりを広め、深める。小学校生活に向け、体験の共有化をはかる。
中期＝小学校1年生入学～	幼稚園から小学校生活へ安心して移行し自分を表現できるようにする。
後期＝～小学校1年生7月	知への興味を耕し、自分で考え学んでいこうとする姿勢を伸ばす。

中期と後期の境は、子どもたちの様子や生活の流れに従って、柔軟にかえていく方が实际的であると考え、今年度より、時期の区切りを決めずに弾力的に扱えるようにした。

(2) 幼稚園の学び（遊びと生活）との連続性を考える

本附属幼稚園では、子どもたち一人ひとりの生きる場を「ステージ」と捉え、子どもたちの「今」と同時に今後の見通しをもちながら、子どもたちが育ちつつある状況を支えていく指標としている。子どもたちの姿や教師の関わりのある方から、「出会い・安定のステージ」「葛藤・探究のステージ」「協力・創造のステージ」とステージを大きく3つに分けている。ステージは、順次段階的に進んでいくものではなく、また、「出会い・安定のステージ」は3歳児、「葛藤・探究のステージ」は4歳児と、年齢によって区切られるものでもない。ステージを行きつ戻りつしながら、子どもたちは成長していくと捉え、ステージを意識においた環境を構成していくことで、子どもたちの発達の適時性を視野に入れた保育を行うことが可能になるのではないかと考えている。また、平成13年度の幼・小連携研究の際、子どもたちの「関わりあい」に視点をあて、関わりあいを成り立たせている要素として浮かび上がってきたものが、「からだ」「もの」「ことば」「ともだち・なかま」の4つの要素である。これらを保育分野とし、保育を行う上での4つの視点として保育に位置づけている。

さらに今年度は、研究のテーマである「協働」に視点をあて、3歳児から5歳児の実践を省察することで、幼稚園3年間の子どもの学び（遊びと生活）を整理することを試みた。表1「幼稚園学びの概要」は、ステージを縦軸に、4つの分野を横軸にとり、一つひとつの遊びや活動の事例の省察を手がかりに、「協働」の視点から整理し、まとめたものである。

幼・小接続期では、こうした幼稚園での学び（遊びと生活）をその基盤に据えたカリキュラム作りを目指したいと考えている。

表1 「幼稚園学びの概要（2006年度版）」

	からだ	もの	ことば	ともだち
 出会い・安定	・自分の気持ちを素直にからだで表現する ・からだを動かすことを楽しむことを知る 感じる ◆教師やともだちとからだに触れ合うことを受け入れる ◆一つひとつのものと出会い、触れる中でからだで感じる ◆戸外でからだを動かすことを楽しむ あらわす ◆気持ち（不安、緊張、うれしさ等）をからだで表現する ◆ともだちの動きを真似たり、音楽にあわせたりからだを動かして楽しむ ◆ごっこ遊びの中でいろいろな役を演じて、いつもとは違うからだの動かし方を楽しむ ◆安心して食べたり、着替えたり、排泄したりする ◆夢中になって遊ぶ	・身の回りにあるいろいろなものと出会い、興味をもつ 出あう ◆自分の好きなものをみつけ、もったり身につけたりする ◆周囲にあるものを使って遊ぶ ◆ものの置き場所や扱い方が分かる ◆自分のもの、人のもの、共有するものがあることに気づく ◆園内の自然と出会い、心を動かし、見たたり触れたり関わったりする 感じる ◆飼育物がいることで気持ちが癒される ◆ものが介して、教師やともだちと一緒にいることが楽しくなる ◆特定の場所を拠り所にする ◆幼稚園でみんなと食べることを喜び楽しむ ◆ともだちとの関わりを通して、ものへの思いが強くなる ◆ものの触覚を、五感を通して味わう あらわす ◆素材や道具を使い、楽しんで書いたり作ったりする	・自分の思いをからだやことばであらわす・体験を通してことばと出会う あらわす ◆自分の思いや要求を、表情、行為、ことばなどで表そうとする 感じる ◆自分が表現したことが相手に伝わる感覚をもつ ◆ことばで自分の気持ちを伝えられる心地よさを味わう ◆見たこと、聞いたこと、動きなどからイメージする 聞く ◆教師やともだちの話を、親しみをもって聞く 出あう ◆ことばのもつリズムやことばを交わす楽しさを知る ◆絵本・紙芝居・劇などに親しみ、興味をもつ ◆身の回りの文字や数字に興味をもつ	・安心感を持ち、ともだちと一緒にいる心地よさを感じる 出あう ◆教師やともだちと関わろうとする ◆教師を信じ、甘えたり、助けを求めたりする ◆一緒に過ごすともだちがいることを知る 感じる ◆ともだちがしていることに興味をもち、まねをする ◆ともだちと関わる楽しさをだんだん感じる ◆ともだちと関わる中で、いろいろな感情をもつ（悲しい・楽しい・さみしい・うれしい） ◆ともだちと一緒に、何かをすることを素直に喜び楽しむ
	・自分の気持ちと体の感覚のずれに向き合う ・人と自分のからだの違いに気づく 感じる・考える ◆からだを使った活動の中で、ともだちとの触れあい、葛藤などを多様に味わう ◆いろいろなものと出会い、今までと違うからだの感覚を体験する ◆からだを使って自分の力を試し、できないくやしさを味わう ◆人と違った自分と向き合い、自信をもったり、なしくたりする あらわす ◆気持ちをうまく伝えることができない時や、思い通りにならない時には、自分の中にためこまずに、からだで表現しようとする ◆いろいろなからだの動かし方を試す	・透ったり悩んだりしながら、ものとの関わりを深める 感じる・考える ◆身近な素材にじかに触れ、ものの性質、量感、形などを感じる ◆環境への関心が深まり熱心に探索する ◆自然に親しむ中で、その不思議さ、美しさを感じ取る あらわす ◆素材や道具を使い、工夫して書いたり作ったりする 関わる ◆飼育物、自然環境に対して、自分本位に行動をする失敗を通して、ふさわしい接し方を知る ◆自分の好きなものや場所があり、それを基盤として生活する ◆何度もやってみる過程で、ものと深く関わる ◆場やものをともだちと共有することで、遊びの中でのものへの取り組みが変わってくる	・自分の心の揺れをことばで表出する ・ともだちとの葛藤の中で、ことばを介して伝え合うこととする あらわす・伝える ◆相手に伝えたい内容を、ことばでさまざまに表現しようとする ◆自分の心の動きや気持ちの揺れを感じ、素直に表現する ◆分からないことを、人にたずねようとする ◆相手に受けとめられることば、人に伝わる表現をみつけようとする 感じる ◆自分の思いをことばで伝えようとするが、うまく伝わらないもどかしさや戸惑いを感じる ◆自分とは違う人の存在や思いに気づく 聞く ◆自分の思いを伝えるだけでなく、人の話も聞くこととする 親しむ ◆絵本・紙芝居・劇などに親しみ、内容をイメージしたり理解したりする ◆身の回りの文字や数字に親しみ、自分なりに使おうとする	・ともだちとの関わりが深まる中で、自分との違いを感じ、ぶつかったり、悩んだりする 感じる ◆ともだちと一緒に過ごす中で、楽しさとともに、自分の思い通りにならないもどかしさ、戸惑いなどを感じる ◆自分とは違うともだちの思いに気づく ◆気の合うなにかのつながり、一体感を感じ、遊びがより楽しくなる ◆遊びのイメージをともだちと共有できるようになる あらわす ◆困ったり助けが必要なときには、教師や友だちを頼ろうとする ◆仲のよいともだち以外のともだちとの出会いや関わりをもつ ◆少しずつ相手に合わせられるようになる
	・自分の気持ちとからだの調和のとれるようになる ・からだを通して、人と呼応して関わることを楽しむ 感じる・考える ◆自分なりに考えて行動しようとする ◆からだを使って、繰り返し取り組み、力を発揮することが楽しくなる あらわす・活かす ◆ともだちと充分からだを動かす ◆自分のイメージを動きで表現したり、人の動きから学んだり、ともだちに教えたりする ◆場の状況、音楽の特徴などを受けとめながら、工夫してからだを動かす ◆身のこなしがよくなり、スムーズにできることが増える ◆人と自分の違いを受けとめ、自分らしく表現し、行動できるようになる ◆気持ちとからだの動きがうまくみ合うようになってくる	・ものとの関わりを通して、生活を豊かにする 感じる・考える ◆自分のイメージに出来るだけ近いものを、作り上げようとする ◆自分のもの、人のもの、みんなのものも大切に思う ◆自分たちが作り上げたものや場所を、年少児が楽しめるものにしていく ◆飼育物の世話を通して、生き物をいたわり、その命、生きる環境を考えるようになる 活かす ◆好きなものや場所を、充分に活用して遊びこむ ◆遊びのイメージを互いに伝えあい、工夫して遊ぶ ◆目的意識がはっきりしてきて、必要なものを作って遊びの中で活かそうとする ◆身近な環境、事象、情報に関心を持ち、取り入れて遊ぶ	・ことばに対する豊かな感覚をもつ ・自分の思いを伝え、相手の思いを受けとめ、ともだちとのことばのやりとりを重ねる 伝える ◆自分の考えや思いを整理して、ことばで表現する ◆求められていることを自分で理解するだけではなく、お互いにことばで伝えあう 聞く・聴く ◆全体に話されることばを、自分に語られることばとして聞く ◆相手のことばを受けとめて、その内容に応じたやりとりをする 親しむ ◆ことばのもつリズムに親しんで、ともだちと声をあわせる ◆絵本・紙芝居・劇などに親しみ、内容を自分たちなりに再現して、表現する楽しさを味わう ◆身の回りの文字や数字に親しみ、生活の中で必要に応じて使おうとする	・それぞれが自分らしくありながら、共に生活する楽しさを知る 感じる ◆教師やともだちに対して、園で共に生活するなにかと感動 ◆なにかと共にひとつのことに取り組む心地よさや充実感を味わう ◆きまりの大切さに気づき守ろうとする ◆役割を担い、人の役に立つうれしさや、生活をつくっていく気持ちをもつ 関わる ◆ともだち一人ひとりの持ち味・興味・性格の違いが分かり、それと認め合うようになる ◆ともだちとアイデア、イメージを出し合いながら、あそびを充実させていく ◆ルールのあるあそびをともだちと楽しむようになる ◆みんなできりこみで、ともだちから学んだり、ともだちに教えたりする ◆ともだちと関わる楽しさを充分味わうとともに、自分のやりたいことを自分なりに追求しようとする

(3) 今年度の取り組み

ア. テーマの設定・・・テーマ「接続期の安定を創る」

今年度は、幼・小・中の教師で入園間もない頃の幼稚園3歳児の保育を見合う機会をもった。3歳児が、初めての集団生活と出会い、緊張したり、戸惑ったりしながらも、教師との信頼関係を基盤に、次第に安定して過ごすことができるようになる過程を教師間で共通理解するに至った。こうした過程は、幼・小の接続期においても同様であろうと考えた。つまり、小学校入学に伴う環境の変化を子どもたちが前向きに受け止め、自分と出会い、他者と出会い、関わりを広げ深めていくことが出来るようにするためには、幼稚園・小学校が子どもたちにとって安定して過ごすことができる場であることが必要だろうと考えたわけである。そこで、幼・小接続期のテーマを「接続期の安定を創る」とした。

イ. 教師の「からだ」に視点をあてた実践の省察

研究の方法としては、実践の省察をその中心に据え、「安定を創る」担い手である教師にポイントをあてることとした。教師と子どもとの関係性が基盤になると考え、関係を構築していく上での教師の「からだ」(視線、呼吸、子どもとの距離、声の大きさや強弱・リズム・抑揚、姿勢、立ち位置…など)に視点をあてた省察を試みた。実践は、幼・小・中の教師で見合うようにし、大学関係者も加わる形で、保育後や授業後に協議会をもった。幼・小の教師の関わりや環境構成の良い面を互いに取り入れるようにし、そのときの子どもたちの実態にあわせつつ、実践に生かすことができるようにと考えた。

ウ. 幼・小接続期カリキュラムの作成

上記のような実践の省察をもとに、平成15年度に作成した「幼・小接続期学びの概要」を見直し、「幼・小接続期カリキュラム」としてまとめることとした。前述のように、幼稚園では、子どもたちの「関わり」に視点を置き、関わりを構成する要素として、「からだ」「もの」「ことば」「ともだち・なかま」の4つの保育分野を立ちあげ、保育を考える上での4つの視点としている。小学校では、既存の教科の枠組みを取り外し、目標、内容、方法を子どもたちの学びにあわせて構成しなおすために、教科から「学習分野」と名称を改め、教科間のつながりも意識におきながら、教育課程に位置づけている。

接続期には、幼稚園の保育分野と、小学校の学習分野の接続ということが課題になる。そこで、保育分野と学習分野の関係がわかりやすくなるように、関係構想図(図1)を作成し整理することとした。

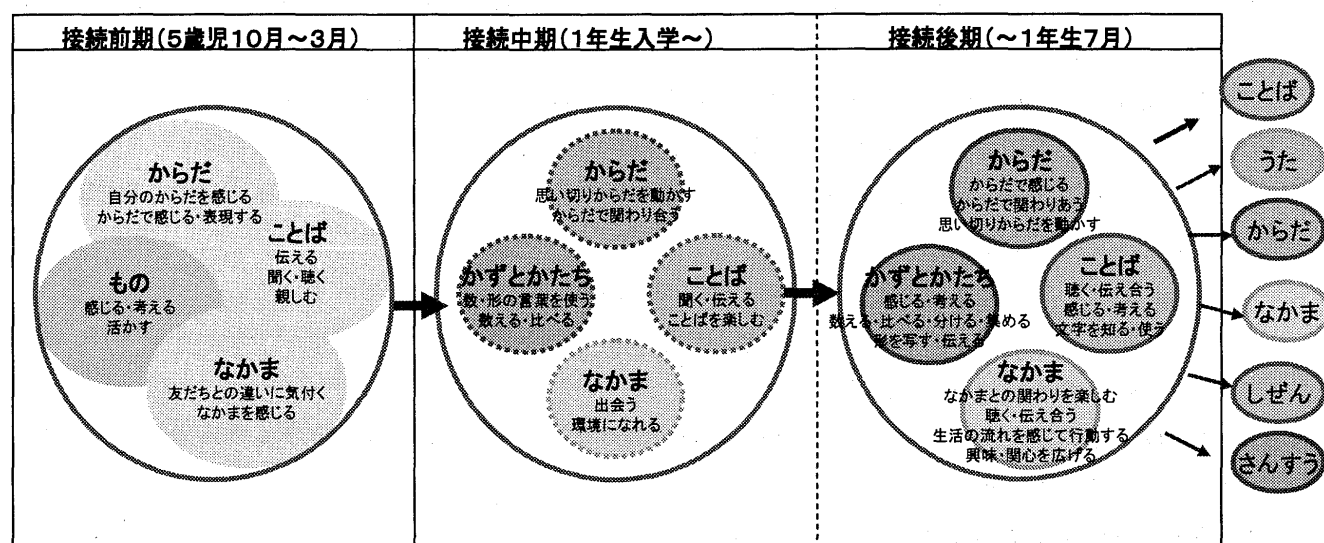


図1 幼・小接続期保育分野・学習分野関係構想図

接続前期では大きな円で示した「生活」の中に4つの保育分野の要素が絡み合った状態を4つの円の重なりで表した。幼稚園の生活が総合的であることを表現したいと考えたためである。小学校入学時より始まる接続中期にはそれが小学校の学習分野へと移行する。子どもの生活から生まれた興味・関心を基にした学びの姿を大切にしたいと考え、各学習分野を囲む円を点線にすることで表現した。同時に、子どもたち一人ひとりが安心できる環境を保証していくことが接続中期の生活の基盤だと考えている。接続後期でも生活の中から生まれる学びを大切にしていくことは変わらない。しかし、「知への興味を耕す」という部分で言葉や数を抽象化して扱うことも加わってくるため、各学習分野を囲む線を実線にした。子どもたちのつながりを意識におき、他者を感じて他者とともに創り上げる協働的な学びの色も次第に濃くなっていくと考えている。接続期以降は「ことば・うた・からだ・なま・しぜん・さんすう」の6つの学習分野の特性を生かした学習が行われるため、各学習分野ごとに小さく実線で囲むことで表したが、「生活の中から生まれる学び」は、接続期以降も大切にしたいと考えている。

2. 開発したカリキュラムとその効果

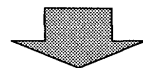
(1) カリキュラムの基盤にあるもの

平成15年度に作成した「幼小接続期学びの概要」では、なめらかな接続を目指す上で、時間や空間、教師の関わりといった環境構成における配慮点をあえて書き記すことで、幼・小の教師間の共通理解を図ることとした。環境面への配慮が、子どもたちの安定を支える基盤になると考え、学びの概要に記すことで、一人ひとりの教師が常に心に留めながら保育・授業を行うことができるように考えた。

今回の研究においては、より具体的な子どもたちの姿を表にあらわすことで、幼・小の教師が接続期全体の見通しをもって、保育・授業を行うことができるようにしたいと考えた。カリキュラムの基盤である時間・空間・教師の関わりといっ

● 幼小接続期カリキュラムの基盤にあるもの

- 安心して生活に取り組める時間や空間
- 生活に即した学びの構成
- 子ども同士の関わり・教師の関わり



接続期の安定

図2

た環境構成はあえて図表化せず、実践の省察を通して、本校園として接続期に大切にしていることの共通理解を図り、以下に示す三点にまとめた。(図2)

第一は、子どもたちが安心して活動に取り組める時間や空間を保証し、自分らしさを生かした学びができるようにしていくこと。

第二は、子どもの生活から生まれた興味・関心を、保育・授業に生かしていくこと。

第三は、保育・授業の中で子どもたちが他者を感じることで活動の設定や子どもを見守り、つないでいく教師の関わりを大事にすること

この3つは、接続期の安定を創る上で欠かせないものであり、幼・小接続期カリキュラムの基盤をなすものであると考えている。

(2) 幼・小接続期カリキュラム

これまでの実践の積み重ねから、表2のようにまとめ、「幼・小接続期カリキュラム」としたが、保育分野・学習分野の関係構想図(図1)、私たちがカリキュラムの基盤にあると捉えているもの(図2)とあわせて理解することで、接続期の実践につなげていきたいと考えている。

表2 幼・小接続期カリキュラム

ねらい	区分	ことば	なかま	からだ	もの
関わりを 広げ・深める 体験の 共有化をはかる	前期	伝える ・自分の考えや思いをことばで表現する ・相手に分かるように話す ・内容に応じたことばのやりとりをする ・わからないことを人にたずねる	友だちとの違いに気づく ・自分とは違うともだちの思いに気付く ・役割を担い、人の役にたつ喜びを感じる ・決まりの大切さに気付き、守る ・ともだち一人ひとりの持ち味・興味・関心の違いに気づき、認めあう	自分のからだを感じる ・力を出し切る ・からだを動かして、繰り返し取り組む ・からだの感覚が自分のものとなってくる ・自分の気持ちと体の調和がとれる	感じる・考える ・動植物をいたわりその命の大切さを実感する ・自然に親しむ中で、その不思議さ・美しさを感じ取る ・ものの性質、量感、形などを感じる ・ものごとに関心をもち、こだわりをもち続ける
	中期	聞く・聴く ・人の話をよく聞く(聞く姿勢) ・聞いたことを理解する ・ことばで聞いたことを想像する	なかまを感じる ・ともだちと呼吸をあわせる (リズムを感じる・一緒に動く・一緒にうたう) ・気持ちを合わせてなかまと共に一つのことに取り組む ・ともだちとアイデアを出しあいながら遊びを充実させる ・ルールのある遊びを楽しむ	からだで感じる、表現する ・からだで関わりあう ・からだで音やリズムを感じる ・イメージを共有する ・イメージを動きで表現する	活かす ・ものを大切に扱う ・ものの性質を活かし、遊びに取り入れる ・ものを活用し、イメージを形にする ・園内の環境(季節)を充分にいかして遊ぶ
小学校生活へ 安心して 移行し、 自分を 表現できる ようにする	中期	聞く・伝える ・自分のことを話す ・最後まで聞く ・意見を伝えようとする ・思いをからだやことばであらわす ことばを楽しむ ・身近なものを表すことばを知る ・みんなで声を合わせる	出あう ・みんなの中の自分を感じる ・学校のことを知る ・自分でできることは自分でする ・まわりの子に気づく ・新しい場所で見える ・季節を感じてあそぶ 環境に慣れる ・友だちと一緒にふれあう・やってみる ・新しい集団で自分を表現しようとする ・発見を伝えようとする ・繰り返しやってみる	思い切りからだを動かす ・みんなのできるあそびをする ・思い切りからだを動かす からだで関わりあう ・みんなで集まる・順番にならぶ ・からだを近づかせてともだちを感じる ・いっしょに音を楽しむ ・リズムを感じる ・感覚でとらえる (息を合わせる・気づく・ふれあう・目で見ると聞く・全身で感じる) ・身近なもののふれあいから感じる ・みんなでいることを心地よく思う	数・形の言葉を使う ・数やかたちを表すことばと出あう ・数え方や数詞を知る ・場所やかたちをあらわすことばを知る 数える・比べる ・順序数と出あう ・かたちを比べる
	後期	聴く・伝えあう ・自分の思いを伝えようとする ・聴きあおうとする ・話を最後まで聞く ・発見やお気に入りを紹介する ・伝えるためのことばで表す 感じる・考える ・事象や友だちの考えについて疑問をもつ ・自分とは違う友だちの思いに気づく ・様子や気持ちを想像する 文字を知る・使う ・生活の中のことばを集める ・生活とかかわりのあるお話を読む	なかまとの関わりを楽しむ ・仲間と息を合わせ、一緒にやってみる ・学校の人とながら ・考えをだしあう ・協力してつくる ・やりたいことを迷いながら選んで決める 聴く・伝えあう ・相手と息を合わせて、一緒にやってみる ・発見をまるごと受けとめる ・伝えあおうとする 生活の流れを感じて行動する ・目的をもつ ・生活の流れや見通しを感じて行動する ・準備や片付けをする 興味・関心を広げる ・見たり触ったりして、ものの形や様子を感じる ・詳しく見て表す ・成長するものを見続ける ・育てる喜びを感じる ・作ったことから発見する ・ためてみる	からだで感じる ・感覚でとらえる (息を合わせる・気づく・ふれあう・目で見ると聞く・全身で感じる) ・できたてを味わう ・リズムを感じる ・特徴をとらえて動く ・声の大小・高低を聞き分ける ・一緒に音楽遊びを楽しむ からだで関わりあう ・一緒に動きをまねる ・友だちとともに活動する事を心地よいと思う ・仲間と息を合わせ、いっしょに活動する 思い切りからだを動かす ・固定遊具で遊ぶ ・場所を生かして遊ぶ ・繰り返し取り組む	感じる・考える ・数やかたちを表す言葉をつかう 数える・比べる・分ける・集める ・いろいろな2量を比べる ・身近なものから同じ数を集める ・数の合成と分解を行う ・大きさ比べ・数比べをする ・具体場面から数を抽象化する 形を写す・伝える ・数やかたちを表す言葉をつかう ・位置を説明する ・身近な形をよく見て写す ・形を組み合わせてつくる

ア. ねらいの捉え

私たちは、これまで、接続期のねらいを時期ごとにわけて捉えてきた。しかし、今年度、幼・小接続期カリキュラム作成において、接続前・中・後期それぞれの実践を振り返り、話し合いを重ねる過程で、それぞれの時期のねらいは、そのときだけのものではないのではないかと考えるに至った。接続前期のねらいは接続期以降の子どもたちの育ちを見通した上でのものであり、接続中期は、接続前期の体験をどのように生かすか、接続後期は接続前期・接続中期の積み重ねの上に立ったものである必要がある。つまり、幼・小の教師が、3つのねらいをもちながら、保育・授業にあたる必要があるのではないかと考えたわけである。幼・小接続期カリキュラム(図3)において、ねらいの欄が曲線で示されているのは、そうした理由からである。

イ. 実践の省察をカリキュラム作成に生かす

実践の省察をどのようにカリキュラムに反映させたかを、以下の3つの実践を例に簡単に説明する。

○接続前期（幼稚園5歳児10月の実践より）

5歳児10月に行った「ファンファンランド」は、子どもたちが、自分の興味・関心をもって取り組んでいる遊びを保証しながら、周囲の友だちの様子に気持ちを向け、関わりを広げていくことができるようにと考え実践した取り組みである。友だちや教師とのやりとりの中で相手のことばに耳を傾け、想像力を働かせること、遊びのイメージを共有しながら、「もの」を活かし、環境を活かしながら、遊びを創り出していくことができるようにすることを大きなねらいとした。こうした体験を重ねることが、小学校以降の生活や学習場面においても、主体的に生活していこうとする基盤になるのではないかと考えている。カリキュラムには、以下のようにまとめた。*（ ）分野名

- ・ものを活用しイメージを形にする・・・「活かす」（もの）
- ・イメージを共有する・・・「からだで感じる・表現する」（からだ）
- ・ことばで聞いたことを想像する・・・「聞く・聴く」（ことば）
- ・友だち一人一人の持ち味・興味・関心に気付き、認めあう・・・「友だちとの違いに気付く」（なかま）

○接続中期（小学校1年生4月の実践より）

今年度は、入学間もない4月、一日の始まりである朝の会に、みんなで考えた名前をつけるのはどうかと教師が投げかけた。登校してすぐの朝の時間、黒板前のスペースにからだを寄せ合って集まり、今日何をして過ごすか、相談したり、確認したりしながら、子どもたちが一日の生活に見通しをもち、一人ひとりが主体的に安定して過ごすことが出来るように配慮してきた。名前をつけることで、朝の時間をより身近に感じ、子どもたちにとって安定した場となり、ともに暮らす友だちの存在に気付いたり、みんなで暮らす心地よさを味わったりできるようにと考えた。

カリキュラムには以下のようにまとめた。*（ ）学習分野名

- ・新しい集団で自分を表現しようとする・・・「環境に慣れる」（なかま）
- ・周りの子に気づく・みんなの中の自分を感じる・・・「出会う」（なかま）
- ・発見をつたえようとする・・・「聞く・伝える」（ことば）
- ・みんなでいることを心地よく思う・・・「からだで関わりあう」（からだ）

○接続後期（小学校1年生5月～6月）

朝の時間に読んだ本や友だちのスピーチの内容から浮かんできた子どもたちの発想を膨らませ、その中に学習の要素を織り込んでいくことを意識しながら、活動を創っていきたいと考えた。「はしびろこうって何？」という一人のこどものつぶやきから、実際に動物園に観にいき、観察したり、動物の真似をしたりしながら、その特徴に気付いていくように働きかけた。そして最後には、自分たちでも動物園を創ってみるという活動へとつなげた。接続前期・中期でつくりあげてきた教師や友だちとの信頼関係を基盤に、子どもたちが自分らしさを発揮し、安定して主体的に過ごすことができるようにすること、その上で、一人一人の違いを生かして学びが広がっていくようにしていくことが、接続後期では大切であると考えている。カリキュラムには以下のようにまとめた。*（ ）学習分野名

- ・自分の思いを伝えようとする 相手を意識してわかるように表す・・・「聴く・伝えあう」（ことば）
- ・見たり触ったりして、ものの形や様子をを感じる・・・「興味・関心を広げる」（なかま）
- ・なかまと息を合わせ、一緒にやってみる・・・「なかまとの関わりを楽しむ」（なかま）
- ・特徴をとらえて動く・・・「からだで感じる」（からだ）
- ・かたちを写す・伝える・・・「かたちを組み合わせて作る」（かずとかたち）

(4) カリキュラム開発の成果

幼稚園5歳児2月の事例より、研究2年次現段階での研究の積み重ねとカリキュラム開発を試みた成果を考察する。

* 「それでもサッカーがしたい！」幼稚園5歳児2月 *

園庭でサッカーに熱中する5歳児男児について、園内の研究会で話題になった。サッカーを通して、人との関わりやルールの意味を学んできた子どもたちの姿を認めながらも、日増しに勢いの増す遊び方に、他の学年の子どもたちにとっての園庭の使い方や狭い園庭での安全性について考える必要性を感じてのことだった。

子どもたちを集めて話し合いをすることにした。「みんなの力が大きくなって、幼稚園の庭では、おさまらなくなってしまったの」と話すと、「少し力を抜くから、やらせてほしい」「小さい組がきたら、必ずいれてあげるから」と、どの子どもたちの表情も真剣そのもの。「それでも、サッカーをやりたい！やらせてほしい」という子どもたちの思いを受け、思い切りサッカーができる場所を一緒に考えることにした。小学校に兄弟が通う子どもが、「校庭がいいんじゃないか」と提案するが、会ったことのない校長先生にどうしたらお願いできるのだろうかという話題になった。様子を観ていたA子の「副園長先生に相談してみたら？」の一声で、幼稚園の職員室に向かった。

副園長は、こどもたちの話を聴き、子どもたちの思いを受け止めると、すぐにその場で小学校の副校長に電話をした。小学校から「どうぞいっしょい」と返事があり、「いってらっしゃい」と副園長に見送られると、子どもたちは、真っ先に小学校の職員室に向かった。電話口の向こうで、自分たちの思いを聞き入れてくれた人がどんな人なのか、会いに行きたかったようだ。小学校の副校長は、職員室まで訪れた園児達に少し驚いた様子であったが、暖かく迎え入れ、校庭まで案内してくれた。

事例のような経緯があり、時間を決めて校庭に出向きサッカーを思い切り楽しんで、また園に戻ってくるとい生活が卒業間際まで続いた。晴れた日には一日中サッカーだけに熱中して過ごしていた子どもたちだが、校庭に行くことが出来るようになってからは、他の遊びに興味・関心をもって取り組むようになり、遊びも関わる友だちにも広がり生まれた。また、小学生がサッカーに入ってきたり、一緒におにごっこをすることになったりと、毎日校庭に通うことで小学生との自然な交流にもつながっている。

今回子どもたちの思いを実現へと導いたのは、幼稚園から小学校へかけた一本の電話であった。子どもたちの思いをその場で伝えあうことができる管理職間のつながりは、幼小連携には欠かせない。また、毎日子どもたちと一緒に気持ちよく校庭に出かけることができること、さらに、訪れた園児が、出会った小学生や教師にいつも暖かく迎え入れられ、楽しんで過ごすことができていることは、これまでの幼小連携の積み重ねがあればこそ成しえたことであるといえるであろう。

幼稚園では、毎年5歳児（特に男児）の育ちが話題になっていた。狭い園庭で力をもてあましている様子の子どものために、どのような環境を保証することができるのかということが課題であった。子どもたちの願いで道が開けた今回の事例を通して、幼小・小連携の意義がさらに深まったと感じる。単なる交流活動に留めず、連携型一貫カリキュラムという形で幼稚園・小学校をつなげようとする私たちの試みは、幼小・小の教師が、関わる子どもたちのこれまでの育ちと、今後の成長を見通しつつ、今の状況を受け止め、支える大きな基盤になっている。

3. 最終年次への課題

(1) 「なめらかな接続」と「適度な段差」について

今年度は「接続期の安定を創る」をテーマに実践に取り組んだ。教師のからだに視点をあて、細やかに実践を省察していくことは、幼・小の教師間の学び合いにおいても有意義であった。接続期を設定してから5年目になり、小学校入学からスタートする接続中期において、教室の黒板前の空間を広くあけ、教師が子どもたちと、からだを寄せ合って話ができるような環境を用意したり、一日の流れを子どもたちと共に考え、子どもたちが主体的に見通しをもって生活できるようにするなど、「なめらかな接続」に焦点をあてた実践は、かなり定着してきた。一方、幼稚園5歳児後半に協働した遊びが豊かに展開するように、環境構成や教師の働きかけを工夫する試みにも継続して取り組んでいる。5歳児がみんなで力を合わせ取り組む心地よさや充実感を味わい、大きくなった喜び、出来るようになった達成感を感じ、小学生になることを心待ちにしている姿がある。こうした子どもたちの期待感にどのように応えていくかということ、つまり「適度な段差」を、私たちはどのように捉え、実践していくかを明らかにすることが今後の課題である。

(2) 「協働」の視点で接続期の実践を省察する

研究全体のテーマである「協働して学びを生み出す子どもを育てる」ために、「協働」へ向かう道筋を明確にしていく必要があるだろう。今年度、幼稚園では、3・4・5歳児の実践を協働の3つの側面（「知性・身体性」「公共性」「共同性」）から分析することを試みた。接続期の実践も「協働」の視点から分析・考察をしていくことで、「協働」を視点にした幼・小の学びの連続性について、まとめることが出来るのではないかと考えている。

(3) 幼・小の教師間の連携強化

研究の積み重ねが、教師間の連携に生かされ、互いの教育観の共通点や違いなどが明確になってきた。共有できることは共有し、違いも排除するのではなく生かし合うことが、本当の意味での連携であることを、一人ひとりの教師が実感し始めている。幼・小連携研究は、さまざまな学校でその取り組みが行われている。中には、幼・小で人事交流を行い、互いの教育を体験する機会をもつなど、多くの公立校において、本校園より先進的な研究が進められている。同じ敷地内に幼稚園・小学校が隣接しているという立地条件を活かし、教師間の交流の場をさまざまな形で取り入れることが出来るように工夫したい。例えば、平成16年度に行ったように、小学校の指導案を幼・小の教師で共に作ったり、幼・小の教師でチームを組み、保育や授業を行ったりなど、互いに場を共有し、子どもたちを見合うことで、幼・小・中12年間の学びの適時性と連続性を考えた連携型一貫カリキュラム作成へとつなげていきたい。さらに、こうした教師間のつながりが、幼・小をつなぐ子どもたちの学びの場を支える基盤であろうと考えている。

(4) 幼・小接続期カリキュラムの見直しと修正

今年度作成した「幼・小接続期カリキュラム」は、今年度の実践を中心にまとめたため、まだ内容が不十分である。来年度以降、さらに実践に照らしながら、見直し修正していく必要がある。同時に、幼・小・中12年間のカリキュラムを見通し、幼稚園の学びの概要とのつながりや、小学校の接続期以降のカリキュラムとのつながりも、丁寧に検討していきたい。